

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2021年 7月 29日	
所属部局・職	霊長類研究所・修士課程学生
氏名	南俊行

<b>1. 派遣国・場所</b> (○○国、○○地域)
京都府南丹市・京都大学芦生演習林
<b>2. 研究課題名</b> (○○の調査、および○○での実験)
基礎フィールドワーク実習 (無雪期)
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)
2021年 7月 19日 ~ 2021年 7月 21日 (3日間)
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (○○大学○○研究所、○○博士/○○動物園、キュレーター、○○氏)
京都大学芦生演習林、京都大学フィールド科学教育研究センター・芦生研究林長 石原正恵准教授
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真 (必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>今回の実習では、京都大学芦生演習林内を散策しながら、演習林で行われている研究や獣害対策について学んだ。行程は以下の通りであった。</p> <p>7/19 午後：芦生演習林到着、石原先生による講義、トロッコ道の散策、資料館の見学                  7/20 午前：演習林の散策、シカ柵の補修作業                  午後：演習林の散策                  7/21 午前：藤原誉さんの講演、解散</p> <p>19日には、芦生研究林長である石原先生の講義ののちに、トロッコ道を散策した。最も印象に残ったのは、2020年から始まった生物多様性の国際プロジェクト「LIFEPLAN」の説明であった。LIFEPLANは、主に昆虫類や菌類を対象に、世界各地で全く同じ手法を用いて生物多様性を評価する大規模な調査である。採用されている手法が興味深く、特に音声を記録する定点カメラは、記録できる音質によっては、動物の行動調査への応用可能性もありそうと感じた。既に動物研究において活用されているかも調べながら、どういった利用方法がありえそうか考えてみたい。</p> <p>20日には、演習林を散策しながら、特にシカ柵について学んだ(図1)。シカ柵の補修作業も行ったが、見た目以上に大変であった。シカ柵設置の際に必要な道具の運び出しや継続的な管理などを考えると、その業務の過酷さに頭が上がらない。また、継続的にシカ柵を設置・管理している2つの地点も見せてもらった。1か所ではシカ柵の効果が見られており、シカ柵を境に明らかに豊かな植生が維持されていた(図2)。一方で、より最近にシカ柵が設置されたもう1か所では、あまり植生の復活が進んでいないようであった。シカの過採食による植生衰退が長期に及ぶことで植生の再生能力が下がるのだとすれば、シカ対策の緊急性は想像よりはるかに高まっているのかもしれない。</p> <p>21日には、美山で活動する「田歌舎」の代表を務められている藤原さんのお話を伺った。戦前からの人間活動による野生動物の増減のお話は興味深かった。また、藤原さんのご経験から考えられるニホンザル対策についても詳しくお話いただき、ニホンザルを調査する身として、猿害対策の難しさを再認識させられた。</p> <p>実習期間中には、たくさんの動植物を観察することができた。植物では、ゼンテイカ、タヌキラン、オヒョウ(以上、植物園内)、アシウスギ、オニグルミ、カツラの太木など、動物では、タヌキ、バツタ類(図3)、トンボ類(図4)、アカハライモリ(図5)、ヒキガエル(図6)、モリアオガエルのオタマジャクシなどが見られた。また、演習林内にはヒグラシの鳴き声が昼過ぎから日暮れまで響き渡っていた。気温も高く天候も晴れであったため、なぜ昼過ぎからヒグラシが鳴いていたのか疑問である。</p> <p>今回の実習は、自身として約2年ぶりとなる合宿形式の野外観察であり、こうした形式での野外調査や自然散策の楽しさを久しぶりに実感することができた。研究に関するヒント、獣害問題の現状やその対策、動植物探しと同定作業の楽しさを得ることができたことで、今後の研究活動や自然との関わり方に良い影響がもたらされると確信している。</p>

# 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



図1. 演習林に設置されていたシカ柵。左の柵の下部にはワイヤーが編まれているが、それでも一部ちぎられていた。

図2. 継続的なシカ柵管理をおこなっている地点。右側が柵で保護されているエリアだが、明らかに植生が豊かであった。



図3. バッタ。フキバッタの仲間に見える。



図4. トンボ。サナエトンボの仲間に見える。



図5. アカハライモリ。



図6. ヒキガエル。調べた限りで、アズマヒキガエルに見える。



## 6. その他 (特記事項など)

芦生演習林長の石原准教授、技術職員の柴田さま、太田さまには、演習林の植生や現状について、非常にわかりやすくガイドをしていただきました。心より感謝申し上げます。田歌舎代表の藤原さまには、美山でのご活動や山の現状についてご講演いただきました。お礼申し上げます。京都大学野生動物研究センターの伊谷教授をはじめとする先生方のおかげで、今回の非常に学びの多い機会に参加することができました。ありがとうございました。本実習は、PWSの支援を受けて実施されました。